

すごーい！な、あの世界に転生した童貞が、天使なかばんちゃんに
べたぼれして、両想いとかありえないだろうな、とあきらめていた
ら実はヤンヤンな堕天使だったことに気が付かずに、やさしい世界
でいきるお話

KEY (ドM)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはんこそば。

K E Y （ドM）と申します。

衝動的にけものフレンズのお話を書きたくなつたので、現在執筆中だゾ。

・転生もの

・転生者は童貞

・転生者は童貞（念押し）

・かばんちゃんにべたぼれ（天使だからね。仕方ないね♂）

・童貞はかばんちゃんに告白する勇気もないし、眺めているだけでいいや、

とあきらめている

・かばんちゃんは・・・・・。

以下、あらすじ。

—————あらすじ—————

リアルの女？

くそだな（確信）

は？かばんちゃん？

どうせネコかぶつてゐるだけだろ？（体験談）あれ？

この子、めちゃくちゃ性格いいし、顔がアイドル並みにかわいいし、いい匂いするし、スタイルいい・・・。

惚れたわ（即落ち）

いい匂いするし、スタイルいい・・・。

あ、でも俺童貞で、恋愛経験ゼロだから

せみなしかな
(涙)

あー、かばんちゃんマジ尊い・・・。

◆ 社畜から解放されただけマジだわ（幽二）

おの人はいふも他のハレ、
の二美の方に通ひます。

あなたはいつも、僕が目を離すと
別の子と仲良くしている。

ても ても

業こもつと触れてまし。

僕にもつともたれかかつてほしい・・・。

胸がすいだら、井戸をあわてて閉めよう。

・・・・ねえ、サーバルちゃん。

僕のお願い聞いてくれる？

そんな泣きそうな顔、しないでも大丈夫だよ。

目 次

童貞、かばんちゃんに惚れる	1
童貞と、さかんなちほー（直喩）	1
童貞、童貞じやなくなる？（かばんちゃんのハイライトが行方不明？ あつ・・・（察し））	1
（元）童貞、策士なアライさんとフエネットクに嵌められる	1
（元）童貞、アライさんとフエネットクとぬつちゅぬつちゅ（意味深）	11 21 33

童貞、かばんちゃんに惚れる

社畜と家畜つて似ているよな。
すごーい！

俺は死ぬまで働き続けられる
フレンズなんだね!!

おかしな毒電波を拾つてしまつた。
さてはて。

これはどういうことなのか。
俺は確かに死んだはずだ。

毎日、睡眠が4時間で、残業が12時まで
だつた。

そんな無理な生活がたたつたのか、
朝、目を覚ましたら声を出せないほど
心臓が痛み出し、そのまま意識を失つてしまつた。

そこまでは覚えている。

うつすらと意識が遠のく中、
やつと死ねた、と思わず笑みを
浮かべたのだ。

「あ、あの・・・？」

「ねえねえ!!あなたはなんのフレンズ!?
お耳も、しつぽもないみたいだけど!!」

だというのに、俺の前にいる、けものみみを
生やして、肩をつかんがくんがくんと
ゆさぶつてくる何も考えてなさそうな顔の少女。

そして、帽子をかぶり、登山用の鞄をせおつた黒髪の美少女の二人にあつけにとられるのだつた。

ようこそ、という声が聞こえた気がした。



さて。

とりあえずサーバルとかいう子の頭を撫でて落ちつかせ、まともに話を聴いてみることに。

その中で、聞き覚えのないワードばかりが出てくる。

セルリアン、フレンズ、じゃぱリパーク、図書館、さばんなちほー、ボス（ラツキーさん、とかばんは呼んでいるようだ）
今でも信じられない。

ここは、俺がいた世界とは違う場所の様だ。
腕を組んで、これからどうしようか

考えていると、サーバルに手を掴まれて
引っ張れる。

「この先に、おいしいじやぱりまんを隠してあるの!!
一緒に食べよう!!」

なにそのアンパンマンの亞種みたいなの、と考えているとあつという間に丸い木のテーブルが置いてある木の根元までやつてきた。イスもちょうど3つある。

「はいー・どーぞ！」

そうして彼女から差し出されたのは、袋詰めにされたパン。

本当にパンが置いてあつた。
さつそく袋を開けてみる。

見た目は普通のパンと変わらない。

コンビニ良く売っている菓子パンそつくりだ。

「かばんちゃんのぶんも、はい！」

「ありがとう」

そういうつてサーバルからじやぱりまんを受け取る
かばん。

・・・・・。

なぜだか、彼女から目が離せない。

性格がよさそうな子だ。

いや、まで。

俺がいた世界では、陰で人の悪口を言つたり、
他人を蹴落とそうとしている女子ばっかり
だつたじやないか。

この子だつて、猫をかぶつていないと限らない。

大体、わたし、かわいいのアピールしている女子に
ろくなやつなんて・・・。

童貞であるがゆえに、恋愛経験が少ないから
湧き出てくる女子へのコンプレックス。
とりあえず、じやぱりまんを食べることに。

一口かじったその瞬間、
涙がぽろぽろとこぼれてきた。

「ど、どうしたの？」

「だ、大丈夫ですか?!」

うう・・と顔を下に向けて、
泣いているところを見られないようにする。

30年間、ずっと独身で、8年も

社畜として生きていた。

家族はとうになくなつていて、
親しい友人もいなかつた人生。

他の人から食べ物を「ごちそうになつた
ことは、本当にひさしぶりで。

思わず涙があふれてくる。

ぐしゅつ・・うま、いなあ・・これえ・・。

「でしょー!？」

ああ、うまい・・・。

おかわりもあるとのことなので、いっぱいもらつた。

◆ 泣きながら食事をするという荒業を行い、おなかもいっぱいになつたので、彼女たちと一緒に行動することになつた。

サーバルは、なんというか、

見た目通り元気いっぱいの子だ。

俺は女子があまり好きじやないけど、
サーバルを嫌いになるやつはないと思
うほどいい子だつた。

まあ、女子小学生を相手にしているよ
うな
気分だから変に意識することもなく
助かるというだけなのだが。

そして、そしてだが、

もう一人の方がやばい。

なんというか、こう、あれだ。

あの黒髪も、プリチーな帽子も、
くりくりとした目も、かわいらしい顔つきも、
スタイルのいい足つきも、慈母のような微笑みも、
ソプラノのような高い声も、前向きなところも……。

率直に言うと、惚れた。
ああ、惚れてしまつた。

なんだ。

なんなんだあの子は。

俺は口リコンじやないが、あやうく
俺の子を産んでくださいと言つてしまいそうになつたぞ。

といふか、いい子過ぎる。

おだやかで、人当たりが良くなつて、
容姿がかわいくつて、料理ができて……。

数々の冒険を一緒に繰り広げ、
俺は彼女にますます惚れこんでいった。

時には、沼地で大きなセルリアンという怪物と戦い。

時には、見つけたバスを動かすために、電池の充電を山の頂上までしにいき。時には、砂嵐ふきあれる砂漠地帯で昔の人間がつくったであろう迷宮を潜り抜け。

それからも、数多くのことがあった。そして、巨大なセルリアンと戦い、サーバルが飲み込まれてしまい、かばんがサーバルを助け、

セルリアンにやられてしまったとき。

俺は、何もできない自分を死ぬほど憎んだ。彼女がこの世から消えてしまった。

その事実が俺をうちのめし、

俺をひざまづかせる。

だが、サーバルは諦めていなかつた。ヒグマたちにサーバルと一緒に助けられ、

目を覚ました彼女は俺の無事を喜ぶとともに、かばんちゃんをすぐに助けに行こうと言い出した。

なんて強い子だ。

そう思わずにはいられなかつた。

その後、巨大セルリアンを倒すために集まってきた他のフレンズたちの力によつてかばんは無事、救出された。



と、いうのが大筋の話だな。

「そうかそうか。ありがとう。」

そういうて、ゆうえんちの中にある
白い丸テーブルに腰かけ、

コーヒーを飲みながら話す俺と彼女。
なんでも、小説を書いているとか。

一回読ませてもらつた、あまりの
面白さに、はやく続きを出ないかと
待つていてる。

しかし、だいたいのことはもう知つて
いるんだろう？
だったら俺の話を聞く必要なんて・・・。

「いいや。こういうのは本人から聞くから
面白いんじゃないか。それに、小説の
ネタになるしね。」

そんなものか。

俺がそういうと「そんなものだよ」と
優雅にコーヒーを飲む。

俺たちが今まで旅をしてきて、出会つた
全てのフレンズたちが今、ここにいる。
巨大セルリアンを倒したおいわい、
だそうだ。（はかせとじよしゅが
料理を食べたいがために開いたような
気もする。）

「ありがとさん。じゃあね。」

そういうてウインクして去つていく。
あー、マブイなあ、と死語を使つて
考えていると、後ろから

突然誰かに目かくしされる。

「だーれだ？」

目を手で隠されたまま、
両腕を組み、座つたまま考える。

ははあ。悪戯好きのアライか？

いや、案外悪ノリするフェネックかもしれない。
ヘラジカはこういうことしないか。

それとも、さつき席を立つて、ここから離れた
ふりでもして俺の後ろの回り込んだオオカミのやつか？

俺が考えていると、目かくしが外されるので
後を振り向く。

「えへへ・・・。僕です。」

心臓がさきほどとは比べ物にならないほど
はやく鼓動を打ち始める。

体温が急上昇し、顔が熱くなるのを感じる。
目を合わせられず、ちよつと視線をずらしたまま
彼女に話しかけられる。

よ。よお。かばん。どうした？

緊張して、ちよつとどもつてしまつた。
が、天使の彼女はそんなこと気にせずに話を
続けてくれる。

「一緒にお話ししたいなー、と思つて・・・。

めいわく、でしたか？」

すっと立ち上がり、近くにあつた椅子の上を
タオルで拭いてきれいにし、新しく
コーヒーを汲む。

それをテーブルの上に置き、

ひざまづいて、椅子に座るよう
彼女に薦める。

さ、どうぞ。

「ありがとうございます。・・・・・あ、おいしい。」

彼女のほめ言葉を聴いて、思わずガツツポーズする。
としょかんに行つたとき、料理関係の本を
大量に読み込んでおいてよかつた・・・!!
料理関係の話題でかばんと話ができるから、
すつごく幸せだ。

感動で少し体を震わせていると、
後から何かがぶつかってきた。
ばこん、と音を立てて、それは
近くの地面にコロコロと転がる。

誰だ?と後ろを向くと、ごめーん、
という顔をしているサーバルが。

「ごめーん!!ねえねえ、いつしょに
あそぼーよ!!」

・・・・・。

何も言わず、ボールをラグビー選手の
ように持ち、サーバルのところまで
ダッシュで向かう。

このあほつ!!せつかくいい雰囲気だったのに!!

「あはははは!!かりごつこだね!!負けないんだからーー!!」
笑いながら逃げ回るサーバル。
絶対許さねえ!!

今日の俺は、狩人だ!!

「・・・・・・・・・」



「・・・・・」

「あ、かばんさんなの・・・ひつ!?」

色々な意味で、恩人のかばんさんが
いるのを見つけたので、声を掛けた。
だけども、明らかに様子が違う。
目に光がない。

そして、じつと何かを見つめている。
その視線の先には・・・。

「アライさん。いい子だから
あっちに行こうねー。」

いつもなら、「やめるのだ、フェネック!!」

とでもいつて振りほどくところだが、
今は彼女がアライさんを助けてくれたのがわかる。

かばんさん・・・。

一体、どうしたのだ?

あとでキツネに教えてもらつた
ダンスを見せて、元気が出るようにするのだ!!

「・・・・・ふふふ。」

童貞と、さかんなちほー（直喩）

巨大セルリアンを倒して数日後。

ここ、ジャパリパークに平和が戻つてきていた。

とはいっても、野生のセルリアンは相変わらずいるし、時々、フレンズがどこかにいなくなってしまうとかはある。

それでも、この平穏な日々というのはかけがえのないものだ。

巨大セルリアンと戦つているときに集まつてくれた面々に、一回お礼周りに行こう、となつてジャパリバスに乗つて、今までめぐつてきた場所を走る俺たち。

ラツキービーストがそれまで運転していたが、体が大破し、かけらになつてしまつたので代わりに運転免許を持つている俺が運転することに。

おれ、オートマしか運転できないんだけど大丈夫だよな・・・?とビクビクしつつ、アクセルを踏み込むと発進するバス。遊園地で行つた祝賀会が終わり、みんなそれぞれの場所に戻つていつた。

かばんは、海の向こうに行くのかと思つたが、まだこの場所にどどまつてゐるようだ。

まあ、同じ人間である俺が隣にいるのだから、わざわざ他の場所まで行く必要もないと感じ始めているのかもしれない。

彼女の心のうちは、彼女にしかわからないが。ヒグマからもらつておいたジャパリマンを食べながら運転していると、横からにゆつとサーバルが顔を覗かせてきているのが見える。
・・・・なにやつてんだ？

「ねえねえ!!それ、おいしそうだね!!」

あ？ああ・・・。

俺が食べている、ヒグマ特注のジャパリマン（カレー味）のことだろうか。だが、これはあまり他の人にあげたくない。
・・・かばんだつたら、何でもあげちゃうが。

ジャパリさんはおいしいが、やつぱり同じような味ばかりだと飽きる。

無視して運転を続けようと右手に持つてあるジャパリマン（カレー味）を食べようとして、サーバルが口に咥えて持つて行ってしまう。

おい!!こらあつ!!

「えへへ・・・。おなかすいちゃつて・・・。
まつたく・・・。

まあ、本気で怒っているわけでもないし、サーバルが子供っぽいのはわかつていることだけに取り返す気も出でこない。

しかし、まだ少しあたべていなかつたから
お腹が空いた。

一旦、バスを止める。

懐から次のジャパリマンを取り出して
食べようとする、また、誰かに
取られる。

「あの・・・。あーん。」

振り返ると、顔をほんのりと赤く染めている
かばん（大天使）の姿が見える。

思わず、げほつ、げほつ、とせき込み、
顔が熱くなる。

おい、あのかばん（女神）が俺に
あーんしてくれるだと？

いやいやいやいやいやいや。

何かの悪ふざけ？

ドツキリ？

いや、アライとか、フエネットクとかなら
ともかく、慈愛の女神のかばんが
そんなことするわけもない。

しばし、ためらって体を動かせずにいたが、
ええい、ままよとばかりにジャパリマンを
口を開けてかぶりつく。

むつしや、むつしやと口の中で
何回も噛み、ごくんと飲み込む。

・・・・やつべえ。

超、おいしい・・・。

「・・・・おかわり、ほしいですか？」

そういうて、残りを差し出してくるかばん。

いい匂いが鼻につき、
くらり、と体が揺れる。

結局、好きな子に食べさせてもらえるという
シチュに抗えず、全部あーんしてもらつた。

今日、俺は死ぬのかな？（猜疑心）

（・・・・えへへへへへへへへへへへ）



なあ、なんでこんなことになつたんだつけ？
「わかんないやつ！」

うん、知つてた。

俺がそういうと、明るい笑顔で
そう言い切るサーバル。
やはリアホの子だつたか・・・
と確信する。

バスでお礼回り（意味浅）していた。
していたの、だが・・・。

まず、ゆうえんちから一番近い
ろつじに行つた。

そこには、タイリクオオカミと
アミメキリンの二人が泊まつていた。
ろつじの管理人であるアリツカゲラの
彼女には、タダで泊めてもらつた借りもある。
3人にお礼を言いにろつじに行つた。

だが、明らかに様子がおかしかつた。

『はあつ♡♡はあつ♡♡いらつしゃ、いませえつ・・♡♡』

息も荒々しく、目の焦点が合っているかあやしいアリツカゲラ。

同じく、いつも騒がしいはずのアミメキリンが何かにじつと耐えるようにぶるぶると小刻みに震えている。

『がるるるるるるるるるる・・・・・♡♡』

ぺろり、と自分の右手の指を艶めかしくなめ、俺からじつと視線を外さないタイリクオオカミ。

直感的に男である俺は悟つてしまつた。

何も言わずに、サーバルとかばんの

二人の腕を取り、全速力で

バスまで走り、乗り込む。

わけがわからないといった様子のかばんと、えー、なになにー?かりごつこー?、と呑気なことをアホ面でほざくサーバル。

おじやましたあああつ!!

バスのアクセルを全力でべた踏みし、ろつじからすぐに離れる。

後を振り返ると、3人が全速力で追つてきているのが見える。

はやつ!!つーかこわつ!!

「わー!!3人ともすぐはやーい!!」

いつの間にかバスから降りて、3人と並走しているサーバル。

あ、あいつ・・・。

だが、3人はサーバルには目もくれずにはバスを追いかけている。

発情期。

まさか、フレンズにもあつたとは・・・。



いやな予感がしつつも、他のところを回った結果。

キツネたちがいる温泉に行つたときは、大丈夫そうだと思つて温泉に入つたが、裸の二人が乱入してきただので濡れた体もふかずに、服をもつてバスに乗り込んで脱出した。

ヘラジカとライオンたちがいた、あの城に行つてみたら、二人と、その仲間たちに全速力で追いかけられ、数の暴力で包围され、危うくつかまりそうになつた。すがる思いで、ツチノコだつたら大丈夫なはず・・・!!

いつも通りの悪態をつかれてお出迎えされる。思わず、つちのこの両脇に両手を入れて、たかいたかいして喜ぶ。

つちのこおおおおおおつ!!お前だけは大丈夫だつて信じていたぞおおおおおつ!!

『な、なんだよつ!!おろせよつ!!』

マジ愛している!!つちのこさんばねえつす!!

『は、はあ!!な、なに言つてんだつ!!』

げし、げし、と下駄で腹を蹴られるがなんともない。

しばらく、この迷宮で隠れれば安全だ。

そう思つていた時期が俺にもありました・・・。

うん、またなんだ。

ツチノコに、発情期があるかどうかはわからない。
だが、生物である以上、性欲もあるわけであり、
子を残そうとするらしい。

バスの中で横になつて眠る俺たち4人。
だらしなく、あおむけになつてバスの
後の部分で寝ていたら、ごそごそ、と
誰かが起きたのに気が付き、目が覚める。
目を開けると、至近距離で、目をつぶつて
キスをしてこようとしてくるツチノコが見える。
・・・・・

一瞬、頭が真っ白になり、何も考えられなくなつたが、
すぐに頭が覚醒し、両腕でツチノコの両肩を抑えて
止める。

ちよ、まつ・・・・。

『お、お前が悪いんだぞっ!!俺は、
そんな気は全くなかつたのに・・・!!
お前が、あんなんことを言うからつ・・・!!』

あ、もうだめだ。

ツチノコつて意外と力が
強いんだな、なんて考えながら
諦めていると、突然、
ツチノコの体が崩れ落ち、
白目をむいて床に倒れる。

そして、その後ろには、
真顔のかばんが右手で手刀を

構えて立っているのが見える。
あ、あの・・・。

「なんですか？」

いつもの優しそうな声。
だが、今日の彼女はどこか
怒つているように見える。

その証拠に、

ニコニコと笑つてはいるが、
目がヤバイ。

瞳孔が開きかけている。
床に正座しながら、
彼女に見下されつつ
弁解する。

・・・ちやうねん。

「何がですか？」

ツチノコ方からやつてきて、
俺はそれを止めようとしただけで
あつて、だから、えつと・・・。
ちゃんと理由を言つてはいるはずなのに、
どこか言い訳がましくなつてしまふ。
緊張で口の中が渴き、

声が思わず震える。

がたがたと体を小刻みに振動
させていると、彼女がいつも通りの
表情に戻る。

「わかっていますよ。あなたが

そんなことする人じやないって。」
どうやら、天使に許されたようだ。
思わず右手でガツツポーズをとる。
・・・ばれないようにこつそりと、

小さく。

「…………だから、やきもきするんだけどなあ。」

え？ それってどういう……？

俺がその言葉の意味を聴こうと
する前に、かばんが正座している
俺の上に乗つかつてくる。

え、あう、え？ え？

突然、好きな子に膝に乗つかられて、
パニックになり、何度も
かばんの顔を見つめる。

「おやすみなさい。」

そういうつて、俺の上にのつかつたまま、
もたれかかつてくる。

俺があおむけに床に寝つ転がると、
彼女もそのまま上から倒れ込んでくる。

落ち着け。

下手な希望はもつな。

これは、彼女にとつて兄弟と
寝るような感覺だ。

決して男女のごによごによなんかじやない。
ぐぐぐ、と大きくなりつつあるあそこを
心の中で般若心境をとなえて必死に沈める。

あかん。

けもの（意味深）フレンズになつてしまふ。

「なんで目の下に隈があるの？ 大丈夫？」

大丈夫だから……。

気にしてくれ。。。

次の日、何も知らずにぐつすりと
寝ていたサーバルに目の下の隈について
聴かれたが必死でごまかす。

言えるかつ!!

(よかつた。僕はちゃんと異性として
見られているみたい。・・・うれしいなあ。
えへへ・・・。今度、寝ているときにつつそり
ほつぺにちゅーしても大丈夫かな・・・。)

童貞、童貞じゃなくなる？（かばんちゃんのハイライ
トが行方不明？あつ・・・（察し））

発情期事件から数日後。

一番安全だと思っていた

ツチノコに襲われ、傷心していたところを、
アルパカに慰めてもらう。

じやぱりカフエにやつてきたのだ。

発情期が終わつたみたいで、

トキとアルパカの二人も、

どうやら襲い掛かつてきたりはしないみたいだつた。
体を震わせながら、フレンズたちの襲撃に
おびえる日々が終わつたことを知ると、
ほつとする。

捕まつたら最後、死ぬまで逆〇イップされていただろうから。
・・・まあ、今でも童貞なんだけどねっ！。

「いんや～。3人そろつてまた来てくれるなんて、
嬉しいねえ～。どうぞ、どうぞ～→」
独特のなまりがある声で俺たちを
迎えてくれるアルパカ。

彼女の入れてくれるお茶や、
コーヒーは苦みが少なくて、
飲みやすいものだ。
ティーカップを右手で持ち、
ぐいっと飲み込む。

熱い液体がのどをつたつて
胃の中に落ちていく。

ふはー、と息を吐き、
うまい、という。

「ほんとく？よかつたあく。」

ニコニコと笑顔を振りまくアルパカ。
やつべえ。

かばんがいなかつたら惚れていたかも。
思わずぼーっとアルパカの笑顔に
見とれる。

つ!! いたつ!?

誰かが、俺の脚を蹴り、
痛みを感じる。

周りを見回しても、

犯人が誰かわからない。

・・・?

気のせいだと思い直し、
アルパカにおかわりを頼む。

「すぐに入れてくるからねー。」

そういって、俺のティーカップを
もつてキッチンに向かう。

あー。

いい形にケツしてなんあ・・・・。
スタイルがいいわあ・・・。

つ!?

ずきり、とまた足が痛む。

周りをもう一度見ても、

アホ面で紅茶を美味しそうに飲む

サーバルと、ふーふー息を吹きかけながら
紅茶を飲むかばんしかいない。

・
・
???

首をひねる。
おかしいなー・・?

(・・・・ばか)



あまりにお茶が美味しかったので
忘れていたが、トキから逃げることも
できずに彼女の歌を聞く羽目に。
最初に会ったときの

デス・ボイスとは違つて

大分まともな歌声になつていてる。

が、それでも耳鳴りがするくらいには
声が高く、聞いているだけで
気が遠くなりそうである。

サーバルは目をまわしながら
白目を若干向いている。

それでも、気を失つてないあたり、
トキがどれくらい歌が上手くなつていてるのかが
わかる。

かばんは、笑顔で歌を聴いている。
まじか・・・・。

と彼女のタフさにますます
惚れて、じつと見つめていると、
こちらに気が付いた彼女が
微笑んでくる。

思わず目をそらし、
顔を伏せる。

やばい。

やばいやばいやばい。

今、心臓が飛び跳ねている。
かばんが可愛すぎて死ねる。

というか、彼女のために死にたい。
そんなあほなことを考えていると、

ジャイアンリサイタル顔負けの
野外ライブは終わりをつけ、
トキがふーっと息を吐いて
ドや顔で俺たちを見てくる。

「どうだつた？」

「前より上手くなつてます！」

「ほんと？うれしいわ。」

サーバルはがくがくと体を
震わせながら、頭を何とか
縦に振つて頷いている。

耳がいいからなあ・・・こいつ。

こんな近くで、大音量の声を聞くのは
きついだろうに。

「・・・あなたは、どうだつた？」

ぶつちやけ、へt

ぎゅつ、と誰かに足を踏まれる。
思わずぴやあつ、と声を出す。

横を見ると、ふくれつ面のかばんがいる。

・・・・・・・・・・・・
とつても、うまいと、おも、う・・・・・。

「ほんと？なら、アンコールしてあげるわ。」

え、ちょま・・・。

大分改善されたとはいえ、カラオケで
30点くらいの歌声を延々聴かされるのは
きつかった。

かばん（女神）の機嫌を損ねるわけにはいかなかつた。



気になつたことがあつたのでアルパカに聴いてみることに。

最近の客足はどうだ？

俺がそういうと、おぼんを前に抱えたまま、
んー、と考える。

おつほ、胸が強調されて・・・。

いだつ!!

げしつ、げしつ、と足を蹴られる。

なんで？！

なんでかばんは俺の脚を

一心不乱に蹴り続けているんだ！？

天使の気に障るようなことをしてしまつたのか。

俺がそう考え、震えていると、

アルパカが口を開く。

「あのろーふうえい？とかいうものが使えるようになつてからは、
地上から多くの子が来るようになつてているけど、空を飛べる
この方が良く来るね！」

彼女が言っているのは、ペダルを濃いで、進むあの乗り物の事だろう。

崖を登るよりもしとはいえ、

やつぱり、標高数百メートルを自力でのぼるのは厳しい。

トキみたいに空を飛べるフレンズの方がやつぱり多く来るのだろう。

・・・・・ま、アルパカは幸せそうだし。よかつた、よかつた。

「あ、そういうえば。」

思い出したかのように、喋り始めるアルパカ。

「サーバルとかばんの二人が

好きな、お菓子を用意したよ。」

「わーい!!ほんとー!!」

「ありがとうございます。」

・・・・・あれ?

俺は?

「ささ、どうぞ食べて、食べて~。」

のけものはいらないんじやなかつたのか (涙)

やはり、キマリは通してもらえたなかつたのだろうか。目を抑えていると、ばた、ばた、と倒れる音が聞える。

えつ、と目を開けて見ると、

サーバルとかばんが床に倒れているのが見える。

・・・・え?

なんで倒れている?

いや、待て。

そういえばお菓子を食べたら……。

いやな予感がしたので、すぐにドアの方まで駆け寄り、逃げようとするが、背中からタツクルされて、床に倒される。

う、うおおおおお!?

お、おっぱいがあああ!?

胸の感触が背中にいいい!?

あ、間違えた。

何事!?

倒れたまま、背中から
しがみついてきている相手を観ると、
アルパカが頬を赤く染め上げ、
すりすりと体をこすりつけているのが見える。

「えへへへ。ずーっとこの機会を
待っていたんだよ〜?」

・・・・・。

天丼はなしでお願いします。

引きつった笑みを浮かべながら
彼女にそういうと、にこり、と
同じように笑うアルパカ。

「・・・いっぱい、子供、作ろうね・・・・・♡♡?」

ああああああああああああああああああああああああああ

11

がばり、と起き上がる。

ドリームか・・・・。

はあ はあ と呼吸が荒いまま
もう一度寝ようと横になると、
あたまに柔らかいモノが当たる。

振り返ると、そこには

白い液体まみれのアルパカと、トキがぐつすりと眠っている。

•
•
•
•

ナアツ！？

拳動不審にせわしなく、交互にトキとアルパ力を見る。二人とも、裸だ。

スタイルが良いので
目に毒である。

おつぱいおつきい。

いや、そんなこと言っている場合じゃない。
なんだこれ？！

ナニ？！

何があつたん？！

俺は一体何をやらかしてしまったのか、肩を抱きしめ、カタカタと震えていると二人が目を覚ます。

「あ、おはよう。」

「・・・おはよう。」

ええ・・・。

何事もなかつたかのように、あいさつしてくる二人。

が、体のあちこちについている白い液体が気になつてそれどころじやない。
「なんかすづくいい夢を見ていた

気がするの。いや。幸せだつたな。」

「私も。・・・二度寝したら、夢の
続きを見られるかしら？」

すみません。

それ、夢だけど、夢じやないんですよ（白目）
が、黙っているのが吉と考え、二人に近くにあつたタオルを渡し、いまだに氣を失っているかばんとサーバルのほおをつつき、起こす。
・・・あれ？

待てよ。

サーバルはともかく、

この状態をかばんに見られたら……。

『……さいていです……。ぐすつ……。

想像しただけで舌を噛んで死にたくなった。

アルパカあつ!!

さ、さつきのお菓子はまだあるか!?

「あるよ。」

は、はやくつ!!

プリーズ!!

彼女が右手に持っている、
クツキーが入った袋を取ろうとすると、
胸の谷間にしまわれる。

ちよつ、ア、アルパカつ!?

「えへへ……。ほら……。
取らないの……?」

「ん……。」

そうこう言つている間にも

かばんが起きてしまいそうだつた。

が、睡眠薬入りのクツキーは
アルパカの胸の中。

鼻血を出しそうになりながら、
アルパカの胸に右手をつつこみ、
クツキーを取り出す。

あんつ♡とかいう嬌声を彼女が
あげて、ムラつとしたが、
今はそれどころじやない。

この時、俺はかなりテンパっていた。

だから、あんなマネを……。
クツキーを口に入れて
かみ碎く。

かばんの両頬をがつちりとつかみ、
ぐいっと引き寄せる。

ん・・・・・。

「・・・・・。・・・・・ふえ？」

口移しで睡眠薬入りの
クツキーを食べさせる。
頼む頼む頼む頼む・・・!!
眠れっ!!

愛しのマイ・エンジエルよっ!!

「・・・はんは（なんだ）。ゆへはー（夢かー）・・・。
ひははへえ・・・・（幸せえ）・・・・♡♡」

何か聞こえたような気がしたが、
一心不乱に彼女にクツキーを食べさせる。
すると、効果があつたのか、
また眠り始めるかばん。
・・・・・あ、危なかつた・・・。

こんなところをかばんに見られたら、
俺は・・・。

すると、ぐらり、と体が崩れて
床に倒れる。

・・・・あ。

睡眠薬入りのクッキーを

口移しで食べさせることはつまり・・・。

「あー。これはチャンスだね」。

ふふふー♡♡』

「もう一回、頑張つてね・・・♡♡』

け、けだものおおおつ!!

俺の叫び声は、空にむなしく響いた。

(・・・・あつ♡♡そこつ♡♡
もつと♡♡もつとくださいつ・・・♡♡)

(元)童貞、策士なアライさんとフエネットクに嵌められる

やつた。

ついにやつてしまつた。

アルパカとトキの二人としつぽり

ドロドロになるまでまぐ合いわつた。

その結果、俺は童貞を失い、

彼女たちは非処女になつた。

だというのに、嬉しそうな顔で

お腹をさする二人。

その顔は緩み切り、新たな生命の誕生を

予感しているかのように慈愛に満ちた笑みを

浮かべていた。

認知。

そんな言葉が浮かんできたが、まさかフレンズは受精しないだろうと考え、かばんとサーバルを連れて

二人のところを後にした。

後部座席で戯れるサーバルとかばんをしり目に放心しながら運転する俺。

かくもいわんが、気持ちがいいというレベルではなかつた。

女性経験なしの俺にとつて、純粹な好意をぶつけてくる

フレンズとのセックスは絶頂の連続であつた。

彼女たちも相性がよかつたのか、もともと、野生動物だった頃の本能が残っていたのか、あさましく、けもののごとく性欲を発散していた。

・・・・まさか、フレンズつて・・・。

自分がたどり着きかけた答えを振り払うように頭を振り、

その考えを即座に頭の中から追い払う。

フレンズにはオスの個体が一体もない。

理由は定かではないが、俺が今まであつてきたフレンズたちはすべてメスだった。

つまり、事実上このじやパリパークにいるオスは俺だけということになる。

トキとアルパカの二人と別れる前の会話が突如頭の中に蘇った。



は？ 気を付ける？

じやぱりバスに乗ろうとする俺の腕を取り、見つめてくるアルパカ。一体何のことだかさっぱりだが、ふざけている様子もない。

「いんや～。昨夜、色々なことしたでしょ～？」

「セツクスしたわね」

おい、女子。

トキの発言にツッコむと恥ずかしそうに顔を赤らめている。

さすがにそれくらいの羞恥心はあるようだ。だつたら最初から言うなよ、とも思うが。

「たぶんだけどね？あなたは他のフレンズから体を求められると思うよ？」

「オスはあなたしかいないから。・・・ モテモテでよかつたわね。」

ちくしょう。本来なら喜ぶべきところなのに、何だか嬉しくない。他に男がいたらそつちに皆いつちまいそうだし。

自分で言つっていてちょっと肩を落とす。

元来、モテる方でもないから仕方ないとは思うが、どうも恋愛には自信が持てない。

恋愛経験の少なさが、俺の胸を締め付けてくる。すると、手を優しく握られ指を絡められる。

「・・・ 馬鹿ね。」

ふつと笑うトキ。

「私たちがあなたを選んだ理由はそんなことじゃないわよ。」「そうだよ。また、一緒に気持ちいいことしたいから寄つていってね。」

お、おう・・・。

面と向かって気があると言われた。

それもこんなにかわいくて優しい子たちに。

男として、嬉しくないわけもなく、照れ隠しに頬をぽりぽりと指で搔く。

が、頭に浮かぶのは彼女の顔。

ちらり、とバスの後部座席を見るとサーバルとじやれているのが見える。

(・・・俺が本当に好きなのは・・・)

自分の気持ちをはつきりと自覚できている。

だが、あと一步が踏み出せない。

俺のこの気持ちは本物だ

それは自信を持つて言える。

だが、彼女はどうなのだろうか。

単に、俺のことを見つけていないのかもしれない。

兄のように思われているのかもしれない。

全部、俺の独りよがりな気持ちでしかないかもしれない。

そう考えると、心臓が締め付けられるように激しく鼓動する。

どんなに考えても彼女の気持ちはわかりはしない。

だが、それでも考えずにはいられなかつた。



(つつてもな・・・)

いつかは、気持ちを伝える必要がある。
いつまでも、二の足を踏んでいるわけにもいくまい。
かばんが海の向こうに行くかどうかは知らない。
だが、もし、海を渡つて残りの人類を探しに行くとなつたら
どうなる？
そこまで考えて辞める。

すると、バスの前に誰かが飛び出してきた。
思わず、ブレーキを踏み、バスを急停止させる。
前を見ると、見覚えのあるやつがびっくりした
顔で俺のほうをじつと見てている。

「お、お前は!？」

・・・アライ?

フレンズー、おバカなアライグマこと
アライが俺の目をじつと見つめていた。

余談だが、止まった反動でサーバルがバスの中から吹っ飛んで
外に飛び出し、かばんは頭を軽く打つたようだ。



目をまわすサーバルとかばん。

その二人をそつとじやパリバスの後部座席に寝かせ、
近くのベンチに腰掛ける俺とアライ。
気になつたので聞いてみる。

なんていきなり飛び出してきたんだ？

「え？あ。あー。うん。あ・・・。」

何がどもる彼女。

いつもは元気いっぱいに何かしら主張している
こいつらしくもない。

体調が悪いのか、顔は赤いし、うつすらと汗をかいて緊張しているのがわかる。

そこでぽん、と右手で左手を叩き何かを思いついたかのようだ。

「あ、あーー！ そうなのだ！」この辺にお宝がある

あると聞いてやつてきたのだ！」

・・・お宝？

はて、と首を傾げる。

こちら辺を何度も通りたることははある。だが、そんな話を聞いたことはないし、財宝らしきものを見かけたこともない。

あるとしたらとつぐにプレーリードッグたちが見つけているだろうし、話のつじつまもあわないような気がする。

そこで彼女に問いかける。

なあ、アラ――

「はいはーい。いい子だからちょっとおとなしくしててねー。」

!?

後から誰かに口を抑えられ、首を絞められる。

果然としているアライの顔が見えたかと思うと、ハツと

何かに気が付いた彼女が

俺に抱き着いてきて、拘束してくる。

「そうそう。それでいいよアライさん。」

「う、うむ。またとないチャンスなのだ！」

サーバルもかばんさんも寝てているようだし、

一気に攻めるのだフエネットク！」

「はいよー」

何だ。

一体何が起きている。

声を出そうにも口を押さえつけられ、
体を抑え込まれて身動きが取れない状況では
抵抗もできない。

そして、ずるずると体を引きずられ
どこかに連れていかかる。

じゃパリバスから大分離れたところまで
連れてこられると、押さえつけられていた
体が自由になる。

苦しかった呼吸を整え、

抗議の声をあげようと口を開く。

はあっ、はあっ・・・。

おまつ——?!
——

そして、口を開けた瞬間

アライの唇が俺の口と重なり合う。

!?

肩を押して突き放そうとするが、
後からフエネットクが俺の後頭部を
しつかりと掴んできて離れられない。

「ダメだよー。アライさんの気持ちを
むげにするなんて。」

「ん・・・。」

首元に腕を回しながら、
小刻みに体を震わせ、
慣れない舌遣いで俺の

口の中をなめまわしてくる。

密着しているからか、

彼女の胸がゆがむほど俺の体に押し付けられ、思わずあそこが膨らんでしまう。

意外と着やせするのか、

アルパカや、カバにも負けないほどの大きさを伴つた弾力である。

満足したのか口を離し、顔を真赤にしながらアライが指を突き付けて言つてきた。

「・・・ふ、ふははははは!! やつたのだ!!」

「アライさん。よくやつたねー。えらいよー。」

いえーい、とハイタツチする二人。

理解が追い付かず、立ち尽くす俺。

キスされたと思ったら、何かをやり遂げた顔で彼女たちがハイタツチし始めた。

何を言つているのかわからないと思うが、

俺も自分で何をいつているのかわかつていない。喜ぶ二人からそつと離れて逃げようとしていると、腹にタックルを喰らう。

ぶほつ・・・と息を吐き、

辛うじて踏ん張り、倒れないよう体を支える。

「どこに行くのだ? まだ、肝心なことを

していないのだ!! えーと、何だつけ?」

「セックスだよ、アライさん。」

「おお! そうなのだ!! セックスしていないのだ!!

だから、ちゃんと最後までするのだ!!」

フェネック、てめつ。

「今なら、私もついてくるよー?」

そういうながら俺の手を取り、自分の胸を触らせて来る。

大きさはそうでもないが、形がしつかりとしており、指の先に柔らかな感触が当たる。

心なしか少し息が荒い気もする。

いつも飄々としていて、弱みを見せないフエネックが俺の前でメスの顔をしている。

その事実が俺を昂らせ、ペニスに血液を送り込む。

ズボンの上からおれのあそこをそつと触りうつとりとした顔になる彼女。

「・・・いい子だねー♡じゃあ、いっぱいきもちいいことしようねー♡」

(元) 童貞、アライさんとフェネックとぬつちゅぬつ
ちゅ (意味深)

「はー♡♡はー♡♡」
「んつ♡んつ♡んつ♡」

ああつ・・・。

横に寝つ転がる俺のペニスを
右手でしごき始めるフェネック。
どこにあつたのかローションボトルから
ローションを垂らし、ぐちゅぐちゅに
ぬめつたそれを一切の容赦なく
ぐちゅぐちゅとしごきあげてくる。

アライに腹の上に乗つかられ、
首に抱き着かれてむちゅるるる、
とキスされる。

耳がぴこぴことせわしなく動いており、
瞳が爛々と輝いているのが見えた。
息が苦しくなるほど濃厚な口づけに、
溜まらず離れようとすると、
それをいやがつたアライが俺の
顔をがつちり両手で抑え込み、
求愛してくる。

「んーつ♡んーつ♡・・・・んつ♡んつ♡んつ♡」
「んー♡おちんちん、ますます大きくなつてきちゃつたよー?♡♡」

あ・・・。

アライの胸に手をやると、想像以上の
大きさと弾力が指に伝わり、
いつまでも触っていたくなるような
感触が手に残る。

もにゅ、むにゅん、と揉みしだくと
びくつ、びくつ、と涙を目から

流すアライが、気持ちよさそうな声をあげる。

「ひいつぐ・・・うああつ♡」

服をまくると、白い肌と、大きな胸が
露になり、溜まらずに押し倒し、

後からのしかかる。

手コキしていたフェネックを一旦離し、
アライのクリトリスを右手の指で
つまみながら延々といじる。

「あつ♡だ、だめなのだあつ♡な、なにか
くるううつ♡き』ちやうよおおつ♡
おー、あー、と獣のような声しか出さず、
喘ぎ続けるアライの姿を見て、
ぶつり、とそれまで抑えていた理性が
切れた俺は、彼女の秘部に自分のモノを
後ろから押し付ける。

「ひいう・・・にや、にやにするのだあ・・?♡」

トロ顔で首だけ後ろに回して俺に聞いてきた
彼女に返事がてら首にそつと右手を添えて
キスをする。

「・・んうー♡これ、すきい・・?♡」

「よかつたねー♡アライさん・・・ほら♡
彼女を速く堕としてあげて?♡」

・・・つぐ

ず、ずずず、とペニスをゆっくりとアライの
中に入れていく。

その瞬間、彼女の絶叫が響き渡る。

「〜〜〜ひにやああああつ♡あー♡あああーーつ♡
がくがくがく、と軽く体がけいれんしており、

声をあげ続けている。

そんな彼女をもつともつと壊すために腰を動かしてピストンし始める。

「ひぐううつ　うううつ　」

あつ、あつ、とバックから犯され続ける彼女の姿を見て、いつもと違うギャップを感じ、ますますいとおしさが心の中に芽生える。ぐいっと腕をつかんで引っ張り、あぐらをかいている俺の上にのつけて下から突きあげる。

「あつ　や、やだあつ　はずかしいいいつ　

ひいあつ　あうああつ　」

顔を両手で隠しそうとする彼女の手を掴んで離させ、ぐるつとこちら向きにする。

目と目が合うと顔を真赤にして、
あううう、とうなる。

「・・・うあつ　ああつ　だめえつ　

み、みないでえつ　」

今度はお返しとばかりに彼女にこちらからキスすると、首に両手をまわされ、また熱烈なキスをされる。

舌が絡むたびにねちより、という音が耳に響き、よだれがお互いの口元から落ちる。

「・・・だ、だしてえつ　赤ちゃんほしいつ　」

・・・つ！アライつ！孕めつ！嫁になれつ！

「うんつ　なるのだあつ　お母さんになるうつ　

・・・あ！で・・・るつ・・・！」

「！ひいああああつ　」

体を大きく後ろにそらし、がくがくと身を震わせ、アライが絶頂する。

こちらも、次いで彼女の子宮に精子を叩き込み、ぐいっと尻を手で掴んで精子がこぼれないようにしつかりと抑える。

「熱いのきてるよお・・・♡ママになるう・・・・・な？」

「・・・はい♡」

そして、ぐつたりと俺の胸に倒れ込む。どうやら失神したらしい。

「はいはーい。次は私の番だから過去の女の事は忘れてねー。」

よいしょーと言いながらアライを俺から引きはがし、そこらへんに雑に置くフェネック。

・・・2人は、親友なんだよな？

「?当たり前だよー。・・・でも、これはこれ、だから・・・。」

女つて怖ええ・・・。

ぶるり、と戦慄していると

今度はフェネックが俺があぐらをかいているところにすっぽんと収まつてくる。

先ほどまでのアライの匂いはせつけんの香だった。

それにたいして、フェネックは香水の甘さを含んだ匂いである。

鼻先をぺろり、と一回舐められると今度は彼女が長い時間、俺の口に自身の唇を押し当ててくる。

何かを確かめるように、彼女は

目をつむりながら長い時間そうしていたが、瞳を空けると薄く微笑み、顔を自ら離す。唇に右手をそつとあて、嬉しそうな表情を浮かべてつぶやいた。

「……うん。決めた。やっぱり

君しかいない。」

え？ ……うおつ。

俺を押し倒し、騎乗位で上から伸し掛かつてくるフエネットク。

右手で俺のモノを掴んでおり、

自分のあそこに擦り付けているのが見える。

「……はーつ♡はーつ♡・・うう・・あつ・・づ、ず、ずと入つていき、

一気に奥まで姦通する。

「・・ああ・・♡お腹が熱い・・・♡」

普段、めったに余裕を崩さない彼女が乱れている姿を見て、たまらずに右手で彼女の胸を揉む。

「やあんつ♡・・・ううつ♡へんたい・・・つ♡」

「つ！お前らがつ・・・さそつて・・・きたんだろうつ・・・！」

「・・・えへへ♡キミと、う・・・なりたか・・・つたからあ・・・

・・あんつ♡あんつ♡

ぱん、ぱん、と下から思いつきり突き上げてやると気持ちよさそうな声をあげて身をよじらせる彼女。その姿を見ているだけで興奮してきて、イきそうになる。

つ・・ぐ・・絞られつ・・！

きゅうきゅう、と中の締め付けが強くなり、こちらも負けずと腰をもつと強く上に突き出す。

「♡♡あつ♡♡子供産むうつ♡♡嫁になるうつ♡♡」

はあつ・・・！はあつ・・・！この淫乱めつ・・・！

「なんだつていいよおつ♡ねえつ♡あんつ♡

結婚しよーよお♡」

ぐつ・・・やべつ・・・！ぐおおおつ！

「♡♡♡♡♡♡♡♡きゅううううんつ♡♡」

尻尾と耳をぴんと張り、目が虚ろになつた
フェネックが甲高い雄たけびを上げて
ぐたあ、と俺の胸元に頭をこすりつけてくる。
あそこからは、俺の精子が垂れているのが
見えた。

「・・・きゅー♡きゅーん♡」

すり、すりと頭をこし、こしと胸に
こすり付けられる。

「・・・えへへえ・・・♡」

隣では、幸せそうな笑みを浮かべたアライが
寝言を漏らして寝ていた。

・・・・やつべえ。どうしよう・・・・。

両手で顔を覆つて、ひとり呟いた。